

体育科・保健体育科における「パフォーマンス」の 意味内容についての検討

—附属小学校・中学校における器械運動の授業分析から—

高橋浩二，久保田もか，河合史菜，山内正毅（長崎大学教育学部）

峰松和夫（長崎大学大学院教育学研究科）

溝上元，丸山博史，森小夜子（長崎大学教育学部附属中学校）

高野友一，橋田晶拓（長崎大学教育学部附属小学校）

1. 序

本研究の目的は、長崎大学教育学部附属小学校及び中学校（以下、附属小学校・中学校）における器械運動の授業分析から体育科・保健体育科における「パフォーマンス」の意味内容を検討することである。附属小学校・中学校では、平成25年度から小・中学校が目指す共通の児童・生徒像を掲げ、9か年を見通した児童・生徒の思考力・判断力・表現力の育成を目指している。それらをもとめるために、「協働」及び「小中連携」をキーワードとして挙げ、「9か年を見通した、協働によって思考力・判断力・表現力を高める学習」を学習像として掲げている。なお、附属小・中学校における「小中連携」は、「6年と3年」という枠組みから捉えられている¹。一方、平成20年版学習指導要領では、「指導内容の体系化」が明確化され、体育科・保健体育科では、「4-4-4」の体系化が図られている。すなわち、小学校1年生から4年生までを「各種の運動の基礎を培う時期」、小学校5年生から中学校2年生までを「多くの領域を学習する時期」、中学校3年生から高校3年生までを「卒業後に少なくとも一つの運動やスポーツを継続することができるようにする時期」と分け、学校段階の接続及び発達の段階のまとまりに応じた目標を設定しようとしている。さらに言えば、運動の取り上げ方及び領域選択については一層の弾力化が図られ、小学校では「体づくり運動」以外の全ての内容について、2学年（1・2年，3・4年，5・6年）のいずれかの学年で指導が可能になっている²。また、学校の実態から考えれば、小学校低学年，中学年，高学年及び中学校・高校の各学年と分けることもできる。

平成29年版学習指導要領の基本には、思考力を中核とした基礎力及び実践力からなる「21世紀型能力」が提示された。この能力は以下の3つの力からなる。すなわち、思考力を中核とした基礎力及び実践力である。それらは、「未知の問題に答えが出せるような思考力と、教室外の現実の問題も他者との対話を通して解決できるような実践力」が「基礎的なりテラシーを超えた教育目標」であり、『『生きる力』が、この21世紀を生き抜く力だと考えれば、こうした実践的な問題解決

力・発見力こそが、その根幹を成すと考えられる。」と述べられている。また、「実践力」は、「主に道徳的・倫理的次元を中心に、身につけた『基礎力』や『思考力』を現実の環境で適用する際に求められる諸能力」と説明されている。さらには、実践と価値が不可分であるとされ、「共有価値」が合わせて構想されるという³。

また、評価についてはパフォーマンス課題あるいはパフォーマンス評価という用語が用いられ、「知っていること」だけでなく「できること」が重視され、さらには「どのように」が目指されている⁴。このパフォーマンスについては、高橋(2016)が、体育授業における「パフォーマンス」の意味内容を、①成果、②「できること」、③達成、④表現に区別し、その曖昧さと混用を指摘している。彼によれば、体育授業における「パフォーマンス」の基盤に「身体的行為による達成」を置く必要があると言う⁵。

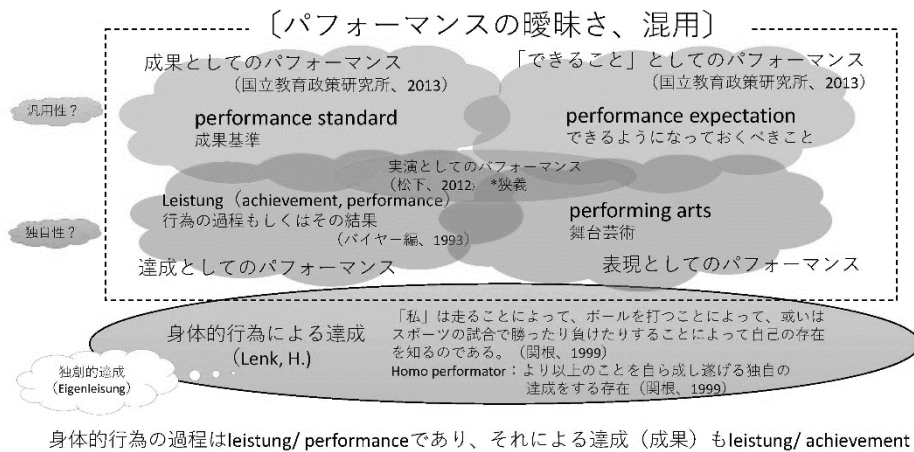


図1. 4つの意味を持つパフォーマンス (高橋, 2016)

以上を踏まえて、本研究では、平成26年度から平成29年度長崎大学教育学部附属小学校・中学校教育研究発表会において実施された体育科・保健体育科の授業の内、器械・器具を使つての運動遊び及び器械運動を取り上げ、「パフォーマンス」の意味内容を考察する。

2. 「器械運動系」領域における「パフォーマンス」

「器械運動系」領域は、小学校低学年における「器械・器具を使つての運動遊び」(「固定施設を使つた遊び」, 「マットを使つた運動遊び」, 「鉄棒を使つた運動遊び」, 「跳び箱を使つた運動遊び」)と小学校中学年以降の「器械運動」(「マット運動」, 「鉄棒運動」, 「平均台運動」(中学校以降), 「跳び箱運動」)とに大別されている⁶。附属小学校では、授業のはじめに「サーキット運動遊び」を実施している。例えば、「①肩支持倒立→②かえるの足うち→③ゆりかご→④ブリッジ→⑤前転がり→⑥後ろ転がり→⑦支持での川跳び」といった内容がある。この運動遊びは、準備運動の要素だけではなく、主となる運動の学習にもなっている。また、

主となる学習内容が特定の技になったり、身体の動作や運動感覚となったりすることもある。附属中学校では、授業のはじめに「慣れの運動」、「サーキット」、「ドリル」等を実施している。例えば、その内容は「①ゆりかご+ゆりかごから立ち上がる、②ブリッジから四つ這いになりブリッジに戻る、③かえるの足うち、④補助倒立」等である。これらの運動もまた準備運動の要素だけではなく、これまでに学習して得られた技能の確認にもなり、それら自体が課題となる運動である。小学校から中学校期まで共通した運動があることは、学習者にとっても学習の連関が見えやすい。一つひとつの技がパフォーマンスとなることが多いため、「器械運動系」領域では、準備運動に位置づけられている運動自体もパフォーマンス課題になり得る。それは、主運動の基となる運動であり、それらの運動を基にして主運動におけるパフォーマンスが生じるからである。したがって、主たる学習内容となる運動のみをパフォーマンス課題とするのではなく、準備を含めた「運動」を課題として設定することが重要である（図2）。

対象：準備運動に位置づけられている運動及び主運動

名称	附属小学校		附属中学校	
	サーキット運動遊び		慣れの運動、サーキット、ドリル、等	
内容（例）	①肩支持倒立 ②かえるの足うち ③ゆりかご ④ブリッジ ⑤前転がり ⑥後ろ転がり ⑦支持での川跳び	主運動： マットを用いた運動遊び（小1） マット運動（後転）（小4）	①ゆりかご+ゆりかごから立ち上がる ②ブリッジから四つ這いになりブリッジに戻る ③かえるの足うち ④補助倒立	主運動： マット運動（「見映えのする」連続技）（中1） マット運動（得意技を中心とした連続技）（中3）
目的・特徴	・準備運動の要素+主となる運動の学習 ・主となる学習内容の特定化、身体の動作や運動感覚の基礎づけ		・準備運動の要素+既習技能の確認 ・それら自体が課題となる運動	
共通項	◎小学校から中学校期まで共通した「運動」⇒学習内容の連関が見えやすい			

◎パフォーマンス課題の基準となる「運動」

「器械運動系」領域では、準備運動に位置づけられている運動自体もパフォーマンス課題になり得る。それは、主運動の基となる運動であり、それらの運動を基にして主運動におけるパフォーマンスが生じるからである。したがって、主たる学習内容となる運動のみをパフォーマンス課題とするのではなく、準備を含めた「運動」を課題として設定することが重要である。

図2. 附属小学校・中学校における運動及び主運動の関係（器械運動）

体育科・保健体育科の授業におけるパフォーマンス課題は、学習内容となる主運動だけに囚われてはならない。パフォーマンスは運動を実践する際に発現するのであり、授業ではそれら全てを評価する必要がある。したがって、準備運動と主運動との関係をより密接にし、運動の構造的特性及び機能的特性に合わせた内容を学習することが重要である⁷。

3. 附属小学校・中学校における授業内容の検討

附属小学校・中学校における教育研究発表会では、「器械運動」系の授業について、附属小学校では平成27年度及び平成29年度、附属中学校では平成26年度及び平成29年度教育研究発表会で実施している。概略は次の通りである。

表 1. 附属小学校・中学校における器械運動系の授業の概要

校種	年度	概要
中学校	26	学 年：1年 単 元：器械運動（マット運動） テーマ：協働による学習 題 材：できる技を組み合わせ、見映えのする連続技を構成しよう 手立て：運動のポイントの提示，ペアによるアドバイス，タブレット端末の遅延装置の活用，アドバイスカード
小学校	27	学 年：6年 単 元：器械運動（アクロ体操） 題 材：技のスペシャリストになり，オリジナルアクロ体操を創作しよう テーマ：身体知の獲得 手立て：動きのモニタリング，ICT 機器の活用（出来映え基準，測定方法表）
小学校	29	学 年：2年 単 元：器械・器具を使つての運動遊び テーマ：身体知の獲得 題 材：できる運動をふやし，できるよワールドにちょうせんしよう 学 年：6年 単 元：器械運動（シンクロ跳び箱） テーマ：身体知の獲得 題 材：跳び箱の技を磨き，シンクロ跳び箱を完成させよう 手立て：身体知の可視化，身体知の意識化，ステップアップタイム，ICT 機器の活用（出来映え基準）
中学校	29	学 年：2年 単元：器械運動（マット運動） テーマ：協働による学び 題 材：「新たな技への挑戦」 専門家から学ぼう！ 手立て：運動図の提示，ホームグループとピース担当者，タブレット端末の活用，エキスパートカード

附属小学校では，平成27年度からテーマを「身体知の獲得」に据え，「動きが『わかる』児童の育成」に励んでいる。すでに述べたように，「器械運動」系では，技のパフォーマンスが課題に取り上げられることが多い。表1から考えても，すでに挙げた①～④の意味内容が含まれている。すなわち，①開脚跳びができたという成果，②学習内容としての開脚跳び，③開脚跳びの達成に向けた練習やその

結果、④「アクロ体操」という表現、である。児童は、混在した「パフォーマンス」の意味内容について体育授業を通じて学習していくことになる。

附属中学校では、平成26年度までのテーマを「主体的に運動し、生涯にわたって運動に親しむ生徒の育成」としている。さらには、平成27年度からテーマを「協働による学び」に据え、平成29年度は知識構成型ジグソー法を取り入れて授業を展開している。中学校の場合は、器械運動におけるパフォーマンス課題が技だけに留まらない。すなわち、パフォーマンス課題が方法にまで発展していく可能性があると言えよう。そのための学習の一つに知識構成型ジグソー法が考えられる。例えば、ピース担当者は自らが実演する存在でなければならない訳ではなく、説明する存在でも良い。また、ホームグループで練習する際は、実演する存在にもなる。このように、多様な存在を担う体育の学習が可能になる(図3)。

5 展 開

過程	目標	生徒の活動	教師の手だて・評価	時間
出会う	ア	1 準備運動と補強運動を行うことで、心と体をほぐす。 2 本時の課題及び活動内容を確認し自己目標を設定する。	1 マット運動に必要な柔軟性や筋力を高める運動を行わせる。その際、けがにつながりやすい体の部位を意識させながら十分に体を動かし、可動範囲を広げるよう助言する。 2 本時の課題と活動内容を提示して、学習の見通しを持たせるとともに、自己目標を立てさせることで、学習意欲を高めさせる。	10
		「新たな技への挑戦」 専門家から学ぼう！		
追究する	R1 R2 イ ウ エ キ オ	3 ホームグループで発展技の練習をする。 発展技 ①とび前転 ④ロンダート ②倒立前転 ⑤前方倒立回転跳び ③伸膝後転 ⑥片足正面水平立ち 活動の手順 1 ピース担当者が説明する 2 説明を聞きメモをとる。 3 技の練習をする。	3 これまでの学習で作成した「エキスパートカード」を基に説明させる。分かったことを学習ノートに記述させ技への理解を深めさせる。練習の際は、「エキスパートカード」を基に互いに助言させるとともに、タブレット端末を準備しておき、互いの動きを撮影して確認させる。 評価 ・発展技のポイントが理解できたか。(観察) <input checked="" type="checkbox"/> ・助言や支援が停滞しているグループには、「エキスパートカード」を確認させるとともに、模範映像や運動図でよりよい動きの確認をさせる。	25
生かす	ア ウ エ カ エ キ	4 ホームグループで練習した発展技の発表会を行う。 5 本時の学習活動を振り返る。	4 仲間の試技を見て、その技の「出来具合表」を基に相互評価させるとともに、気づいたことを付せん紙に記入して試技者に渡すようにすることで、課題を明らかにさせる。 5 本時の自己目標に対する自己評価を行わせるとともに、「エキスパートカード」や付せん紙から自己の課題を見いださせる。	15

図3. 中学校の学習指導計画案(本時)⁸

4. 結及び今後の課題

本考察の目的は、附属小学校・中学校における器械運動の授業分析から保健体育科における「パフォーマンス」の意味内容を検討することであった。考察の結果、以下の事が明らかにされた。

一つ目は、パフォーマンスの曖昧さと意味の混在である。器械運動系では、4つの意味（成果、「できること」、達成、表現）を混在させた状態で学習することになる。二つ目は、器械運動系のパフォーマンスにおける運動は主となる運動だけでなく、準備運動をも含んでいることである。この含みによって、準備運動が単なる準備にならないような工夫が可能になる。三つ目は、パフォーマンスが課題だけでなく方法にまで発展していく可能性があることである。この点は平成29年版学習指導要領における「知識及び技能」、「思考力・判断力・表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」の基礎として考えることができる。

今後は、パフォーマンス課題を授業にどのように位置づけていくかを検討する必要がある。この検討によって、指導と評価の一体化に向けた考察を展開することができるようになるであろう。

付記：本考察は、長崎大学教育学部平成27年度研究企画推進プロジェクト（学部長裁量経費）『マット運動におけるパフォーマンス課題の研究』の助成を受けて行われた。

【引用・参考文献】

- 1 長崎大学教育学部附属小学校・長崎大学教育学部附属中学校（2013）平成25年度教育研究発表会研究紀要。
- 2 文部科学省（2008）小学校学習指導要領解説 体育編，p.4，p.11.
- 3 国立教育政策研究所（2013）教育課程の編成に関する基礎的研究報告書5 社会の変化に対応する資質や能力を育成する教育課程編成の基本原則．<https://www.nier.go.jp/kaihatsu/pdf/Houkokusho-5.pdf>
- 4 国立教育政策研究所（2013），同上報告。
- 5 高橋浩二（2016）体育授業における「パフォーマンス」の意味内容．九州体育・スポーツ学会第65回大会ポスター発表。
- 6 文部科学省（2008）小学校学習指導要領解説 体育編，p.12，p.90.詳細については以下を参照されたい。文部科学省（2015）器械運動の指導の手引．東洋館出版社。
- 7 高橋浩二，河合史菜，峰松和夫，山内正毅，丸山博文，溝上元，森小夜子，高野友一，橋田晶拓（2016）「器械運動系」領域においてパフォーマンス課題の基準となる「運動」．教育実践研究フォーラム2016 in 長崎大学．ポスター発表，2016.
- 8 長崎大学教育学部附属小学校・中学校（2018）平成29年度研究紀要及び学習指導案集．長崎大学教育学部附属中学校。